



## 「自立と依存」について考える-人権尊重教育の視点から-

校長 伊藤 栄司

5月25日から3日間、六年生は日光移動教室を実施しました。歴史ある社寺や豊かな自然に触れ、教室では得られない「本物」に出会うことで、歴史・文化・自然についての理解を一層深めることができました。実体験を通して学ぶ姿は、子供たちにとって大変充実した時間になりました。

また、生活面においては、時間や約束を守り、自分の役割を果たそうとするなど、最高学年としての責任ある行動が随所に見られました。互いに声を掛け合い、助け合いながら活動する姿からは、友達との信頼関係がより深まったことが伺えます。学びとともに、心の成長を実感する貴重な機会となりました。

### 頼らないこと？

教育の目的の一つに「自立した子どもを育てる」とよく耳にします。移動教室での6年生を見ていても、しっかり自立しているなど感じる出来事がたくさんありました。自分で考え、判断し、行動する様子を見ると、さすが6年生、自立しているなど感じます。

一方で、「自立」のイメージは、「人に頼らないこと」「一人で何でもできること」と狭く捉えてしまいがちです。しかし、「一人でできる」を自立と捉えると「頼ること＝弱い」「支援や助けが必要＝自立していない」という考えにつながりやすく、人が本来もっている支えを受ける権利を見えにくくしてしまう危険性があります。

### 自立のとらえ直し

小児科医の熊谷晋一郎さんは、ご自身の経験から「自立とは、依存先を増やすことだ」と語っています。人は誰もが完全に一人で生きているわけではないからです。家族、友人、学校、地域、社会制度、また、道具や技術など、たくさんの人や人の手に支えられながら日常生活を送っています。人々の支えは、安心して生きるための社会的基盤であり、人権を具体的に支える仕組みでもあります。

現代社会では、支えが整っていることの方が多いので、「自分の力だけで生きている」ように感じる場合があります。しかし、コロナ禍で経験したように、どれか一つでも欠けたとき生活はたちまち困難になります。つまり、自立とは「誰にも頼らない状態」ではなく、「必要に応じて適切な支えにつながることできる状態」であると言えます。

### 「頼る」「頼られる」経験

子どもたちも日々の学校生活の中で、多くの人に支えられながら成長しています。学習でつまずいたときに友達に聞いたり、困ったときに先生に相談したり、家庭で見守られ励まされたりした経験は、「助けを求めてもよい」「自分は支えられてよい存在だ」との感覚を育てます。また、安心して助けを求められる経験は、自分の存在が尊重されていると感じる人権感覚の土台になります。

さらに、支えられる経験を重ねることで、子どもはやがて他者の困り感にも気付くようになります。そして、「今度は自分が手を差し伸べる番だ」と考えられるようになっていきます。「頼ること」と「頼られること」の往復の中で、子どもたちは他者も大切に、尊重し合う姿勢を学びます。

### 人権が息づく学校をめざして

本校では昨年度から、東京都人権尊重教育推進校の指定を受けています。教職員も含め、人権感覚を醸成するためには何ができるか日々考えながら教育活動を進めています。多様な関係の中で互いを認め合い、支え合いながら、一人ひとりが自分なりの歩みで自立へと向かうことができるよう指導していきます。様々な角度から人権教育について考え、得られた学びを11月20日に研究発表会を開き発表する予定です。

※熊谷晋一郎さん：小児科医／東京大学先端科学技術研究センター・特任講師

1977年、山口県生まれ。小児科医。新生児仮死の後遺症で脳性まひに、以後車いす生活となる。小中高と普通学校で統合教育を経験。大学在学中は全国障害学生支援センターのスタッフとして、他の障害者とともに高等教育支援活動をおこなう。